
ぼくら の ヒミツ基地

野島美帆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくら の ヒミツ基地

【著者名】

野島美帆

N1-863F

【あらすじ】

田舎の名学年一クラスしかない小学校に始めて転校生がやってきた！転校生の提案で秘密基地を作ることに・・・少し懐かしさを感じる日常を描いた小説です。

第一話 「秘密基地」

高山 旬 まあまあお金持ちで成績も優秀。口数が少なくつて一部の女子には人気。

杉野 広康 あたしはヤスつて読んでる。力持ちだけぞいざつて時に頼りになれない。

そういうあたしは鮎川 由奈 どこにでもいそうな子。

・・・・・ また同じクラス、同じ先生・・・もう5年生なのに何一つ変わらない。そんな時だった・・・彼が来たのは。

「水谷 壮太。よろしくお願いします。」

それは、きつと学校始まって以来の初めての転入生だった。

ぼくらの

ヒミツ基地

第一話 「

秘密基地」

キーンゴーンカーンゴーン

「先生、さよなら。」

みんなで大声で挨拶をして、帰るうとしていたあたしを先生は引き止めた。

「鮎川、水谷と一緒に帰つてやつてくれないか? 一人で帰らせるのは危険だ。」

「えつ!」

「由奈、遅いぞーー！」

校門でヤスと旬が待っていた。

「『めん、『めん。』」

あたしは水谷君を連れて駆けていった。

「あれ？ そいつ・・・・・」

ヤスが水谷君を指差した。

「この人だあれ？」

ヤスの影からひょっこりとせつちやんが顔を出した。せつちゃん
というのはヤスの弟で小学一年生。いつもヘルメットを何故か被り、
ぶかぶかの服を着ている。本人は「すぐ成長するから」って言つて
るけどなかなか背が伸びてない。本名は仙人。

「転入生で水谷 壮太っていうの。めんどくさいから壮太ね！」

「壮太壮太。」

せつちゃんが繰り返し言つた。

「いきなり呼び捨て・・・・・」

旬が何か言つていたみたいだけど、あたしには聞こえなかつた。
というより聞く気がなかつた。

「でまあ『のまえのポケモンがまあ・・・』『そいつそいつのシーン
良かつた。』

ペちゃくちやと喋りながら、まるで同じとこりを何回も通つてい
るような一行に変わらない田んぼの風景をただひたすら歩いていた。

「・・・旬、壮太と何か話しなさいよ・・・ボソッ」

「やだ。」

即答。

「なんで？」

「めんどくさい。」

またも即答。

「もういいわよ！あたしが話しかけるから。」

そんなことを話しているうちに、やっと田んぼから林の風景に変わった。

「あのさ、壮太はどうしてこんな田舎に・・・」

あたしが言いかけた直後だった。壮太は立ち止まって林の方をぼんやりと見ていた。

「どうかした？林に何かいた？」

「・・・。」

返事がない。

「僕ここでイノシシみたことある〜！かっこよかつた〜！〜！」
せつちゃんが手を上げていった。

「かっこよかつたつて・・・イノシシでたら逃げましょうつて先

生言つてたじやん。」

「すごく大きかつたよ〜！〜！」

話を聞いてないんだからせつちゃんは・・・。

ザツザツザツ

つて・・・壮太、林に入つてるし！〜！

「ダメだよ、壮太！林は危険だから先生が入つちゃダメだつて！

！」

「・・・。」

駄目だ。話を聞いてない。

「俺が連れ戻してきてやる！〜！」

ヤスが林の中に走つていった。

「ヤス！〜！」

どうしよう・・・ヤスも行つちゃつた。

「あんちゃん待つて〜！」

せつちゃんまで行つてしまつた。

ザツ

旬も林に踏み込んだ。

「行かないのか？」

「……行くわよ！ 行けばいいんでしょーー！」

やけくそで林にがに股で入つてやつた。

「蜘蛛の巣引っかかったしもつやだー！！・・・？」

ぽかーんと壮太たちが立ち止まり、何かを見つめていた。

「何やつて・・・ん・・んん？」

壮太たちの目線の先にはトラックがあつた。車体は色落ちが酷く、あちこち錆びていた。タイヤもパンクして隙間から草が車体に絡みつくように生えていた。コンテナの上には、枯れ葉が積もつていた。窓ガラスにはまるで映画に出てきそうなほど見事な波紋状のヒビが入つてあり、今にでも割れそうだ。錆びの部分がただれ、とても不気味だ。

「なんでこんなとこにトラックが・・・」

「あのさ・・・」

「？」

「コレ、俺たちの秘密基地にしようぜーー！」

さつきまで下ばつか向いて暗くて何も言葉を発しなかつたのに・・・・・壮太があたしたちに初めて言つたのがそれだつた。驚いた。こんなに大きい声が出せるなんて・・・いきなり顔を上げて・・・・・そして、なにより・・・こんなに楽しそうに笑うなんて思つてもみなかつた。

「・・・・・はあ？ なんていきなり秘密基地なの？！」

「今から家に帰つて掃除道具持つてココに集合なー！」

「人の話聞きなさいよー！」

壮太はノリノリだつた。にしても、自分勝手な・・・・。

「んじや、解散！！」

そう言つと壮太はものすごい速さで林を駆けて行つた。

「足、はやつ！－！」

あたしは反論する間もなく走り去られて、ただ立ち去へすしかなかつた。

「・・・・・・じうする？」

ヤスが言つた。

「じうするたつて・・・」

どうすればいいのか分からなくておろおろと困惑っていた。

「いいよ。やる、秘密基地。」

旬が言つた。

「旬、マジで言つてんの？」

「別に家に居ても暇だし。」

旬にキッパリと言わるとなんか嫌でも納得せざる負えなくなるんだよね・・・。

しううがないのであたしたちは一寸別れて家から掃除道具を持つてきた。

「やつときれいになつたあー・・・！」

みんな疲れきつてだらだらと汗が流れしていく。まるで川にそのまま飛び込んだように髪も、服もびっしょりになつていた。

幸運なことにコンテナの中は案外大した錆もなく、どちらかというときれいだった。

もちろんトラックの運転席も乗れるよう砂やゴミを取り除いた。車体に積もつていた枯れ葉は見事に一枚も残らずゴミ袋の中に入れだ。

「旬、今何時？あんた懐中時計持つてんでしょ。」

あたしは暑さのあまり手を顔に仰いで言つた。

「6時ちょい前。」

「え？うそ・・・やばい、あたし帰る！－！」

あたしは猛ダッシュでさっさと帰った。

「なんだ・・・あいつ?」

壮太が言った。

「由奈んちのおばさんは恐いから・・・。」

旬が答えた。

「ふうん。」

帰りながらも、あたしは明日が楽しみで胸を躍らせていた。魔法とかファンタジーとかそんなものじゃない。けれど、明日はきっと

何か起こるようなそんな気がした。

その日見た夕日は、どことなくいつもと違つて見えた。

第一話 「秘密基地」（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
なるべく毎日更新しようと願っていますのでよろしくお願いします。

第一話 「ビー玉」

「秘密基地完成！！」

壮太が拳を突き上げて言つた。

粗大ゴミから拾つた綿がはみ出たソファーや学校のいらなくなつた足がガタガタの図工室の椅子。テーブル代わりの段ボール箱。端っこには鉄製の缶が置かれている。たぶんゴミ箱の代わりだろう。。。

「昨日、掃除して、今日、できたばかりなのにもうほこりっぽい。」

由奈の言つとおり、コンテナの戸が開きっぱなしになつたせいか、砂ぼこりが充満し、あちこちに泥がついていた。

「これぐらい平氣だつて！」

由奈の事などお構いなしに壮太は基地のソファーに座つた。

「そいえばコレ！かあちゃんがみんなと一緒に飲めつて。。。。ヤスとせつちゃんが取り出したのはラムネだつた。

「ラムネだ！ありがと。」

せつちゃんが由奈に、ヤスが旬に壮太の分も手渡した。

「由奈～そいえば昨日のデジモン録画した～？見逃しちやつてさ～。」

「はあ？もちろんしてあるけど、なんであたしが貸さないといけないのよ？」

旬は壮太に渡そとしたらが、壮太は由奈と話していく気付かないようだ。

「。。。。。。」

シャカシャカ・・・

「ん？・・・あ！旬ありがとな！」

やつと旬に気付き、壮太はラムネを受け取つた。

「んじゅ基地完成もかねて乾杯しようぜ！」

・・・
壮太がそう言いつつラムネ瓶のビー玉を思いつきり押し入れた瞬

四

ドバー

まるで噴水のようにラムネが飛び出し、壮太の顔面に直撃した。

「何、てめえ脳ついたる!!」

・・・
ひ

旬は斜め下へ目線を逸らし、ラムネを一口飲んだ。

「ねえ？ 結局、乾杯はどうなったの～？」

由奈が待ちくたびれて言った。

卷之三

カラソツ

ぼくの

ヒミツ基地

卷一

ଶ

た。 三十九の井の中を井口の方へ向じて、しづかに、

由奈の声でせつちゃんはふと我に返つた。

「曲奈は取れる?」

「えつ！」

（あたし取り方知らないし・・・てゆかこれって取れるの？・・・ん～謎かも・・・え～つとこ～ゆ～ときはあ～～・・・）

「せつちゃんのお兄さんはヤスだからヤスに頼みなさい…」「そつかー。あんちゃん力持ちだしね！」

「そうそう。」

（ナイスあたし！…上手く）まかせた！）

「あんちゃん、ビー玉取つて～～！」

せつちゃんはヤスにラムネ瓶を突き出した。

「瓶口についてるプラスチックを抜けばいいはず…ふんっ！」

そういうと、ヤスは瓶の底側と瓶口を力いつぱい引っ張った。

（・・・・やべえ・・・・全然抜けない・・・）のままじやみなに笑われる！仙人もがつかりするだろ（つ・・・）（つ）はあいつに任せよう・・・）

「俺がビー玉取り出してもいいんだが、壮太がやりたそうな顔してるからあいつに譲つてやつてくれ！」

そう言われてせつちゃんは壮太の方を見た。

「そうかなあ・・・？」

「絶対やりたいはずだ！ほら、行つて来い！…」

無理やり背中を押され、せつちゃんは壮太にラムネ瓶を突き出した。

た。

「壮太、ビー玉取れる？」

「ん？」

（ビー玉があ・・・！・・・そうだ！あいつならどんな反応するか見物してやりう！）

「そーゆーのは頭のいい旬先生に頼んでみるといい。」

「旬せんせい？・・・わかつた！旬先生にみてもらひー。」

せつちゃんは旬にラムネ瓶を突き出した。

「旬先生、ビー玉取つてください…」

「！・・・・・・・・・。」

旬は少し立ち尽くすと、何も言わずにトコトコと歩き出した。ゴミ箱代わりの鉄製の缶を持って、墓地の外に出た。缶と言つても大人の膝丈ぐらいある大きめの缶である。

ガツシャア・・・ン

! ! !

缶の内側にラムネ瓶を勢い良くぶつけた。

七

親指を突き上げ、旬は満足そうだ。

「旬つて割と大胆な行動に出るよね……。」

「か害るなら害る」で言えよ

二二二

匂の手からせつぢやんの手へ渡された。

「はうあ～・・・」

せつちゃんは田をキラキラと輝かせながら、奇声を発した。よつ

王が欲しかったのだから

新編 金華山志

ガサゴノ・・・・・ガサゴノ・・・・・

「何やつてんだ？」

基地であるトライシクのトランшеを突っ込んでこねせりがやんこヤス

カタノツ

せつちゃんは下からお菓子の缶を取り出した。

ペコンツ

正ね蓋と共に缶の蓋が浮いた。

「うう」

アーティストの育成

お葉子の缶の中には、王が数え切れないほど入っていました。

「これ全部せっちゃんが集めたの?」

た。

「うん！」

「スッゲー！――！――！のビーポー玉キレイだぜー！」

壮太が手にしたビーポー玉は黒いのに不思議な輝きを放っていた。まるで映画『Men in Black』に出てくる銀河のようでも美しかった。

第三話 「ヒーロー」

「ねえ、次、壮太の番だよ。」

秘密基地の中、トランプでババ抜きをしていたときだつた。

「・・・決めた！」

「なにを・・・？」

「基地もあるし、丁度五人だし・・・ヒーロー」ひこうじよつぢー！

！」

ぼくらの

ヒミツ基地

ヒーロー」ひこうじ

第三話 「

「はあ？ なんで小学五年生にもなつてヒーロー」ひこうじなんて・・・

「そいえば、よくカクレンジャー見てたな～。」

「そうそう。あのオープニング俺まだ歌えるぜ！」

由奈の意見は放つておいてなにやらヤスと壮太はカクレンジャーで盛り上がつている。

「ぼく、やりたーー！」

手を突き上げてせつちゃんが言ひ。

「仙人がやるなら俺もやる！」

ヤスは弟思いというかなんといふか・・・。

「旬はやらないでしょ？」

由奈は焦つたように言ひ。

「・・・暇だし。」

たぶん遠回しに「めぬ」と書こたいんだね。

「んじゃ、俺レッド～！～旬がブルーで、仙人がグリーン、ヤスがイエローで、由奈がピンクな！」

「んな勝手に・・・。」

「待てよ！俺がレッドだろ！」

ヤスが壮太に異議を唱えた。ヤスにもこだわりがあるのだろう・・

「…」アリス、ジョンソンで決かね?」「…

「ぜつてえ負けねえからな！」

そこまで張り切るものでもない気がする。が、二人は真剣だ。指を組んで、手の中を覗くとジャンケンに必ず勝つとか、もしくは手の中に宇宙が見えるとかわけのわからない噂があった。そのせいか、一人とも指を組み、真剣に手の中を覗いている。

一回勝負力大

静かだ・・・。高がジャンケンなのに緊張感を感じさせる雰囲気が立ち込めていた。

「最初はグー、またまたグー、いかりやチョーすけ、あたまはパー、正義が勝つとは限らない、最初はグー、ジャンケンポイ！」

なんとも長い前振りで結局勝ったのは・・・

「へやー、あやじでチヨキだしゃあよかつた。。。」

壮太だつた。壮太がパー、ヤスがグーだつた。

「へへ、太てる奴は大抵ケバニーしか出さないんだよ。」

壮太が嫌味つたらしく言つ。

ヤヌが怒りをこらえて身体が震えている。

「」の「」

「こんなもんいつ作つたんだか・・・。」

「こんなもんいつ作つたんだか・・・。」

「授業中！案外ばれねえぞ！弾は三発ずつしかないから大事に使えよ。それじゃあ、パトロールにレツ ツゴー……」

壮太はそう言って拳を突き上げて墓地から出た。

「どうして」「なんにも平和なんだ……！」
そりや田舎だもの。というより、通行人さえいない道をパトロー
ルしても意味があるはずない。

「みんな～～い」

仙人もヒリロリに餓きてきたよ」と

あ 分 た 」

由奈が指差した先には先生が歩いていた。たぶん帰る途中なのだが。

1

先生は

「アーティストによるアーティスト」

バ
シ
ツ

壮太が先生にゴム鉄砲を撃ち始めた。そのせいか、先生が鬼の形相でこちらに猛スピードでやつてくる。

「あはーー！ 何してんのよ、あんたは？！」

何故たか分からなしが、曲奈たちも逃げるはめになってしまった。

逃げながらも壮太はゴム鉄砲を撃つて いる。

「弾切れた！みんなも撃たないと追いつかれるぞ！」

ノシノ
ノシノ
ノシノ
ノシノ

みんな
奪ってまし！ではかあたし強の付け方知らんないんだけ

۷۰

「もう一ピックは使えないやつだな～。」

「こんなことぐらいで使えないやつと言われてモジリ反応すべきな
のか由奈は困ってしまった。

「ケツ

「あ・・・。」

「テンツ

せつちゃんがこけてしまった。

結局、みんなは道の真ん中に正座せられ、先生のくびくびと説
教を長ーーーい間、聞くこととなつた。道のアスファルトは塗装
が悪く、まるで砂利の上に正座しているように痛かった。
説教が終わる頃には、空が赤く染まつっていた。

キキーツ

人も車も通らなかつたこの道に、一台の車が停まつた。

「旬、今日は外で食事にするから乗りなさい。」

旬のお母さんとお父さんだ。

パタンツ

旬は車に乗り、ドアを閉めた。

「また明日にでも、旬と遊んでくださいね。それじゃあ・・・。」

「またな～。」

「またね。」

「またね。」

みんなは挨拶したが、旬は軽く手を振るだけだった。それから車
は走り出し、行つてしまつた・・・。

「んじゅ、俺らも帰る。またな～。」

「バイバイ！」

「うん、またね。」

ヤスとせつちゃんも帰つて行つた。

「オオオ

あたりには鐘の音が響いている。六時になつたことを知らせていいるのだ。

「やばっ！早く帰らないと…」

由奈が慌てている。

「由奈…」

走つて帰ろうとする由奈を壮太は止めた。

「いつしょに帰ろう…」

「…いいよ。いつしょに帰ろう。」

由奈は「コツと笑い、言つた。由奈は急いでいたが、いつもと雰囲気が違う壮太を放つておけなかつたのだろう。壮太の顔には、不安や悲しみが見えた。

「…………」

一人並んで歩いているが、沈黙が続いていた。

「…ねえ？ そいえば聞いてなかつたけど…なんで越してきたの？」

話を振つてきたのは由奈だつた。

「…まあちゃんと住んでんだ。」

「お父さんとお母さんは？」

「天国。たぶん地獄には言つてないと思つ。」

「ごめん…」

「謝んなくともいいよ。寂しくないし。でも匂がちょっと羨ましかつた。」

「匂の家族は仲良いしね…。」

何故だか由奈の表情も暗くなつてきた。

「由奈んちは？」

「…あたしの家は…」

「あ！あれ、由奈の母ちゃんじやね？」

由奈の家の前で女人人が立っていた。壮太の言つとおり、お母さんらしい。

「由奈、おかえり。あら、お友達と一緒になのね。」

「え・ええ。」

「こり笑つてゐるお母さんとは裏腹に由奈は苦笑いをしている。

「じゃあ、またなー由奈ー。」

「うん、また。」

由奈と話して気が楽になつたのか、壮太は元気に賭けていった。逆に、由奈には元気がなく、手を振り終わつた後の下に下りした手が震えていた。拳を握つても震えが止むことはなかつた。

第四話 「野球帽」

「「うーーん・・・なんかいつもと違ひ・・・。」
由奈がせつちやんを見て何か悩んでいる。

「ん?・・・どうした?・?」

そこへ壮太がやってきた。

「ああ、壮太。いや、ちよつとせつちやんがいつもとどうかが違つてゐるよ!」
見えるんだけど、そのどうかが分からなこのよ・・・。」

「はあ?」

壮太がじるじるとせつちやんを見渡した。

「・・・・・・・ 気のせいだろ。」

「そんなことないわよ。どつかが・・・どつかが違つのよ。」

二人はせつちやんの服、顔、靴までじるじると見るが悩んでばかりだ。

トウトウトウトウ・・・

そこへ今度は由がやつてきた。そして、せつちやんの皿の前まで
来た。

「・・・・・ キャップ。」

ぼくの

ヒリシ基地

第四話 「

野球帽」

「ああ!・!・! ホントだ!・! いつもならヘルメットなのに、今日は野

球帽になつてゐ!・!」

「しかも逆に被つてゐ!・! なんで?・!・!」

壮太も由奈も驚きが隠せないらしい。

チョイ チョイ

ヤスの手が基地の外から手招きをしている。壮太たちは、せっち
ゃん一人だけを残し、ヤスの方へ集まつた。

「なんで、野球帽になつてんだ？・・・ボソッ」

「それがさ・・・かくかくしかじか・・・ボソッ」

ひそひそ話でせつちゃんには聞こえないようにしている。

「はあ？」

野球帽になつた理由をヤスから聞いたがいまいち分からないよう
だ。

「だから～、サトシがモンスター・ボール使うとき逆に被るじや
ん。それにポケモンの新しい金と銀だけ？あの主人公もだし、口
ナンもやつてたとか言つて昨日いきなり帽子買いに行かされて・・・
ボソッ」

「つまり、キャラクターの影響つことね・・・ボソッ」

由奈が呆れている。

「でもな～、野球帽に気付くとスッゲエ違和感あるよな～・・・
ボソッ」

壮太がチラツとせつちゃんを見る。

「だろ～。それに俺的にはヘルメットの方がかわいいと思つんだ
よ！」

「・・・・・・・。

「みんなちょっと引いている。
「ブラン・・・」

バツ

「つ、つまりはヘルメットをまた被つてもうえるようにすればい
いのよね！」

旬が何か言おうとしたが、由奈が手で口を慌てて塞いだ。

「キャラクターで野球帽を被るよくなつたんだから、ヘルメットを被つたキャラクターを見せればいいはずー！」

由奈は意外とノリノリだ。

「つてことで！ヘルメットと並べばロックマンのメットールでしょー！」

イラストをせつちゃんに見せながら言った。

「ザコキャラじやん。」

ガビーーーン

せつちゃんの発言に由奈に衝撃が走り、落ち込んでしまった。せつちゃんには悪気はないのだろうが、由奈は相当ショックを受けてしまつたらしい。

「イラスト自作までしてがんばったのに・・・」

「自作だつたんだ。」

「メットールこんなにかわいいのに・・・」

「メットール好きだつたんだ。」

「ええい！それならデジモンのソラで・・・」

いきなり由奈は立ち直り、叫んだ。

「ソラ、女じやん。」

ガガガーーーーン

今度は由奈の頭に大岩が落ちてきたような衝撃が走った。

「た、たしかにさあ・・・ソラはおんなのこだけさあ・・・こ
うさあ・・・なんかさあ・・・」

崩れるよつに倒れながら、由奈はぶつぶつと何か呟いていた。

「そうだー野球帽よりヘルメットの方が頑丈で安全性の高いところを見せねばー！」

壮太が提案した。

「・・・・・。」

「いいか、仙人？もしもだ！もしも金属バットが空から降つてきたとしたら・・・」

絶対にないとと思う。とみんな思いながらも壮太の話を聞いている。

「ヘルメットだと・・・」

ガンツ

そう言つと、壮太は地べたに置いたヘルメットに金属バットを自分の肩の位置から落とした。

「ほら、このとおり！傷一つなし、凹んでもいない。野球帽だとどうなると思つ？」

ビシツ

壮太はせつちゃんに向かつて指差した。

「ああ？」

せつちゃんは首をかしげている。

「では、実験してみよう！」

壮太はせつちゃんの帽子を取り上げ、地べたに置いた。

ベシヤツ

丸みを帯びていた野球帽は、見事にも凹み、ある意味悲惨にも見えた。

「・・・・・う・うう・・・・うわあああああん！！壮太が壊したあああああ！！！」

せつちゃんが泣き始めてしまった。

「え、いや、ちょっと待つて！凹んだだけで元に戻せるから！－－－いきなりのせつちゃんの号泣に壮太はあたふたしながら帽子を拾い、凹みを直した。

「結局、まだ野球帽のままだね・・・せつちゃん。」

せつちゃんは野球帽が気に入つたみたいだ。

「・・・・・。」

トコトコトコ・・・

せつちゃんの方へ匂が歩いていった。

「・・・・・・・・ボソッ」

何かをせつちゃんに話しているようだが、壮太たちのところまでは聞こえなかつた。

フルフルフル

なんだか涙が零れそうな顔をしてせつちゃんは首を横に振つている。

力ポツ

「！――！」

せつちゃんが野球帽ではなく、ヘルメットを被つた。

「匂、一体どんなマジック使つたんだよ！」

せつちゃんと匂のところへ、壮太たちは駆け寄つてきた。

「・・・・・マッキー。」

「そつちのマジックじゃなくて魔法の方だと思つよ。」

由奈が助言した。

「・・・・ヘルメットの安全性。」

「それなら壮太もしたじやない。」

「あと・・・」

「あと?」

「今年の夏に起ること。」

匂とせつちゃん以外みんな頭がちんぷんかんぷんだ。
でも、せつちゃんがヘルメットを被つてくれるよつこなつたのでみんな一安心した。

そして、今年が一九九九年で『恐怖の大王』が来ることをみんな思い出したのは、もつと後のことだつた。

第五話 「雨」

ザ――――――

大粒の雨が地面に叩きつけるよつて降り、ものすげに大きな音を奏でている。

「あ～あ、図書の本、整理してたらこんなに降るなんて・・・ついてかま～。」

学校の玄関で生徒、先生が誰一人いない中、由奈だけが立つたまま空を見上げていた。

ぼくらの

ヒミツ基地

「雨」

第五話 「

「雨、すい、い土砂降り・・・もうそろそろ梅雨だもんねえ。こんなことなら、旬に本の整理手伝つてもらえばよかつた。旬も同じ図書委員だし、傘持つてたし・・・。」

今更悔いても仕方ないと分かつていても、つい口に出てしまふのである。

チラツ

後ろを振り向くと靴箱の隣には、傘立てとバケツが置いてあつた。

「ハア・・・さすがにバケツ被つて帰るのも恥ずかしいしな～・・・

ガサガサ・・・

何か物音がする。玄関の端に設置してある倉庫からだ。

(この時間、生徒は残っていないはず。先生も職員会議で全員職員室に集まっているはずなのに。)

ガラツ

不審人物かもしけないと思った由奈は、倉庫の扉が開く音と同時に靴箱の陰に隠れた。

「ゲホッ、ゴホッ！ 埃っぽいし、臭いし、最悪だなこの倉庫。」

倉庫の中から出てきたのは壮太だった。

「壮太！あんたこんな場所で何してたの？！」

壮太と氣付くと由奈は鞄箱の陰から出てきた。

「曲奈にそなにしてんだよ？ そいえば、先生は？」

先生？担任の先生ならもうとっくに帰ったけど

「うしお！居残り勉強しなくて済んだぜ！」

壮太はガツツポーズを取っている。

「あんた、まさかまた宿題忘れたの？」

一男には宿題よりやらなければいけない

にかひしつかてん

由奈が呆れている。

「あ、そうだ！ 狂太、傘持ってる？」

「男はそんなもん持たない！」

「じゃあ、男は濡れて帰るわけ?」

曲奈に言われて、壯太は即答できなかつた。

一
あ
!」

何か閃いたのか、壯太はまた倉庫に入つていつた。

「あつた、あつた！」

数分して壮太が倉庫から出てきた。何か持つている。

「ジオジオジーン！！」

「…・…・…おやが、そひど歸らう…・…・。」

「・・・まさか、それで帰る?」
「

由奈の額から変な汗が流れている。

「それがどうかしたか？」

「だって、それ……砂だらけだし、汚いし……」

「雨で汚れも流れりって！そーゆーおまえはビニヤッて帰るんだよ。」

「うう。」

由奈は痛いところを疲れて返す言葉がなかつた。

「いつしょに入るか？」

壮太は由奈にビニールシートを差し出した。

「…………しようがないから入つてやるわよ！」

由奈は、ビニールシートを壮太の手から鶯amp;#25681;

1・んで取ると、後ろを向いて照れ隠しした。

「もうちょっと寄つてくれないと濡れちゃうじゃない！」

「んなこと言つたつて、これ以上寄つたら、俺が濡れるんだよー。」

結局、ビニールシートの取り合いで喧嘩になつてしまつた。

「大体このアイディアは俺が考えたんだぞー。」

「あたしは濡れたらいけないのーー！」

「なんで濡れちゃだめか理由言つてみろよー！」

「…………」

壮太の言葉が何か引っかかったのか、由奈はひどく動搖している。

「…………ママに・・・ママに怒られるの……。」

壮太の耳には、微かにそう聞こえた。

バサツ

「それやる。俺、濡れるの好きだし。」

壮太は、ビニールシートを、ロープのように由奈に被せてあげた。

「でも・・・・ありがと。」

由奈は何か言いかけたが、笑つて御礼を言った。

ポツッ ポツポツ・・・

由奈の家に着くころには、雨は止みかけていた。

「今日はホントにありがと！おかげで濡れずに済んだわ。」

「明日、そのシート返すの忘れんなよ。」

「分かってるって。それじゃ、またあした。」

「おうつ。またな。」

由奈と壮太は手を振つて別れた。

キイ・・・

由奈が玄関のドアを開けようとした時だった。

「由奈　　！！

壮太の叫び声が聞こえた。振り返つてみると、小さく映る壮太の影が、空を差していた。

「レインボ――――！」

空には小さいけれど、とてもきれいな虹が架かっていた。

第六話 「水泳教室」

「あーそろそろ行こう。」

壮太はそう言つと、立ち上がつて袋を背負つた。

「どこいくの?」

由奈が訊いた。

「今日、休日だけ学校のプール開いてるって先生言つたじゃん。それにほら、俺もみんなもプールセット持つて来てるぞ。」

壮太の言つとおり、みんな秘密基地に来る前に用意しておいたようだ。

「由奈は行かないのか?」

ぼくらの

ヒミツ基地

水泳教室

第六話 「

「え・・・あたし、いいよ。行かなくて・・・。」

由奈は手を横に振りながら言つた。

「ん?・・・まさかおまえ泳げないんだろ? !俺が教えてやるから来いって・・・。」

壮太は、由奈の手を握り、強引にプールに連れて行こうとしている。

「あれ?・・・でも由奈たしかあよげ・・・」

何か言おうとしたせつちやんに匂がそつと口を塞いだ。

「何も言つな。」

「にゃんじょ?」

口が塞がつていいで、せつちやんの滑舌が悪くなつた。ビツ
やら「なんで？」と聞きたかつたらしく。

「・・・・・」のほうがおもしろい。

旬はいつもの無表情でそう言った。

ボーカーフェイス

「んじゃ、今から由奈のために水泳教室を開くべさ。もぢりぐ、口
一チは俺だ。」

ピコーン

壮太の言つてこることもおかまになしに、由奈はゲームボーイを
やり始めた。

「まずは、水に慣れることが基本だよな。・・・・つか、聞けよ
！――！」

やつと壮太がツツ口マリを入れた。

「あ、コンパンが進化しちやつ。BBBBBb・・・。」

「マジで聞けよ――！」

ボタンを連打する由奈に対し、だんだん壮太に苛立ちが見え始め
た。

「大体、何でおまえ水着じやねえんだよ――！」

「壮太が家にも寄らせてくれないで、ここに来たから水着持つて
来れなかつたんじやん。」

「うつ・・・・、そういえば、もう夏なのになんでおまえ長袖、
長ズボンなんだよ？！暑苦しいぞ――！」

壮太は言い返せないので話を切り替えることにした。

「といえば、由奈、最近ミニスカ履かないな。去年は季節関係な
く冬でも履いてたのに。」

ヤスも指摘した。

「ねえ、なんで？」

せつちやんも理由を知りたいようだ。

「・・・・・そんなの決まってるじゃない。日焼けしないよ！」

「」

由奈の発言の仕方は、苛立つて叫んだよつとも見えるが、強がつてこるよにも見えた。

「日焼けしたくなかったり」となにに来なきやいにじやん……。

「だから、あんたがここに連れてきたんでしょ！」

壮太は天然なのかわざとなのか、由奈を怒らせるような発言ばかりをしてくる。

「でゆか、あたし泳げるし……」

「へ？」

「そうだよ～。由奈去年の水泳大会1位だったもん。」

由奈の発言にせつちゃんがフォローを加えた。

「マジ？」

「クッ

壮太は旬とヤスの方を振り返ると、一人ともうなずいた。

「・・・・・」

プールには他の生徒たちの楽しそうな声が響いているのに、壮太たちのところにだけは、異様な静寂が漂っていた。

第七話 「董」

「ねえ、今日行こうよ。」
せつちゃんがヤスになにやら駄々をこねていいよつだ。

「何の話しが？」

由奈が一人に聞いた。

「今日の夜、ホテル見に行きたいの！」

ぼくらの

ヒルジ基地

第七話 「

董」

「ホテル？」

由奈が首をかしげている。

「違う違う、ホタル！」

ヤスが手を横に振つて答えた。

「ああーもうたくさん飛んでるらしいね！」

「んじゃ、今日みんなで行こうぜ！」

三人の話に入ってきたのは壮太だった。

「えつ！」

「由奈、何か都合悪いのか？」

「そーゆーわけじゃないけど・・・明日も学校だよ？」

「大丈夫だつて！旬も来るんだぞ！」

遠くから話を聞いている旬に壮太は言った。

午後八時、あたりはすっかり黒一色だ。

秘密基地の前に、旬、ヤスとせつちゃん、壮太の順に集まつてき

た。

「「「めん、おまたせ〜！・・・はあつはあ・・・。」

最後に息を切らせながら、由奈がやつてきた。

「遅いぞ！」

「いつも遅刻してゐるあなたに言われたくないわ。」

由奈は壮太に言い返した。

「そんなことより早く行くぞ！」

ヤスが言い、みんな歩き出した。

「・・・・大丈夫か？」

歩き出し始めた由奈に対し、旬が言った。

「大丈夫よ。急いで来たから疲れただけ。」

「・・・・・家のことだよ。」

「！」

旬は眉間にしわを寄せ、由奈を通り越して言った。旬に言われ、

由奈は一瞬足が止まつてしまつた。

「わあつーすげえ！！」

川原に着くと無数のホタルが飛び交つていた。

「間近に見れたらいいけど、籠持つてきてないからすぐ逃げちゃうだらうな。」

由奈がそんなことを言つていると旬がすぐそばの畠に入つていつた。

「旬、何してんだ？」

壮太が訊いた。

「あ、旬、今年もやるんだあ！」

「毎年恒例みたいなもんだよな。」

せつちゃんとヤスがわくわくしながら言つてゐる。

パキッ

太い玉ねぎの葉を折り、旬が畑から帰つてきた。玉ねぎの葉は、ねぎつぽいが食べてもおいしくなく、処分されるので、折つてもなんら被害はない。毎年、後でちゃんと由奈たちは畑の持ち主に謝りに行くが、叱られることはなかった。

パシッ

スポーツ

旬は両手でホタルを捕まえると、中空のねぎの中に虫を入れた。「なんで、ねぎに虫入れてんの？！」

壮太が驚きながら言った。

「ねぎ、粘着性強いから逃げれねえんだよ。まあ、長く入れてると弱るからすぐ逃がすけど。」

ヤスが偉そうに壮太に説明している。ねぎがまるでライトセーバーのように光っている。とてもきれいだ。

「螢つて、案外かわいい虫してるとわよね・・・。」

「つか、どれが目？」

「ここにあるじゃん！」

そんな話をしている間にも、あたりはどんどんと暗闇を帯びていく。

く。

「そろそろ、逃がして帰りましょう。」

「なら、俺、逃がしたい！」

壮太はねぎから螢を取り、手をゆっくり開けた。

ふわわあ・・・

螢は、ゆっくりと飛び上がり、近くに生えている木に留まった。それがイルミネーションのようで、ずっと見ていたかったが、みんなは、振り返りながらも、家へ帰つていった。

第八話 「壊」

「ホタルを見て帰った翌朝」

「ママ、おはよう。」

ネグリジエ姿で、目を擦りながら、階段から由奈が降りてきた。

「あなた昨日の夜、家から抜け出したわね・・・。」

テーブルに向かって座っているママは、由奈が来るなりそう言つた。後姿の背中が何かを物語つているかのように、異様で、暗くて、とても嫌な雰囲気だつた。

ぼくらの

ヒミツ基地

「壊」

ザ――――――

「今日、スッゲエ雨だな・・・。」

学校の教室の窓からグラウンドを見ながら壮太が言つた。

キンコーンカーンコーン

ガラガラ・・・

チャイムと同時に先生が教室に入ってきた。

「それじゃあ、朝のホームルーム始めるぞお。」

先生の声でみんなは一斉に席に着いた。

「あれ?・・・由奈、今日来てないな。風邪か? 昨日、あんなに

元気だったのに・・・。」

壮太の言つたとおり、一つ席がぽつかりと空いていた。

「・・・・・。」

旬は何かに気付いたのか、由奈の席をじっと見つめた。

「大雨警報が出てるので、今日は午後はない。みんなは、帰る支度が出来次第、直ちに帰るよつ。」

「先生、さよなら。」

「先帰る。」

生徒全員で先生に挨拶を済ますと旬は急ぎ足で教室を後にした。
「俺と仙人も今日は早く走つて帰るから、一緒に帰れねえ。畠の手伝いしなきやいけねえんだ。」

「雨なのになか？」

「雨だからやることがいっぱいあるんだよ。じゃあな！」

ヤスも行つてしまつた。

「・・・俺も警報出でるし、わつさと支度して帰るわ。」

ランドセルを背負い、一人のんびりと教室を出た。

（あ！そいえば、来週の月曜、リコーダーのテストだっけ？・・・たしかリコーダーこの間、秘密基地に持つてつてそのまんまだ。土日はばあちゃんが畠仕事手伝つてくれつて言つてたから取りに行く暇ないだうなあ・・・。しうがない、秘密基地に寄つて帰るしかないかあ～。でも、警報出でるから、真つ先に帰つたほうがいいかな～・・・。）

玄関で靴を履き替えながら、ふとそんなことを思つていた。

ボツツ　ボツツ　ボツボツツ

大粒の雨で傘にも大きな音が鳴り響いている。

バシャバシャバシャバシャ

誰かが走つてくる。

「ああ、やつぱり高山さんとの旬君だった。こんにちわ。」

走ってきたのは由奈のお父さんだった。

「…………こんにちわ。」

「それにしてもすゞい雨だねえ。」

「…………。」

由奈のお父さんはセカンドバッグを傘代わりにして、雨を凌いでいた。

「…………入りますか？」

旬は由奈のお父さんの方へ傘の柄を掲げた。

「いいのかい？」

「丁度由奈の家にお見舞いに行くところですから。」

「えつ？由奈、今日学校休んだの？残業で結局昨日帰れなかつたから、おじさん知らなかつたよ。」

「…………。」

それを聞いたせいか、旬の顔つきがますます険しくなった。

ザー————

「早くし」「ーダー取つて帰ろ!」

どんどんと激しさが増す雨の中で、壮太は秘密基地のある林の中に入つていいく。

ガチャッ

由奈のお父さんは、家の玄関のドアを開け、旬を家の中に入れてあげた。

「ただいまー。」

「…………。」

返事がない。

「まあ、とりあえず上がつてくれ。由奈は風邪かなんかで寝込んで自分の部屋にいるだろつから。」

「お邪魔します。」

そう言つと、匂は階段を上つて一階に行き、由奈の部屋のドアの前に立つた。

コンツ　コンツ

「由奈・・・いるか・・・？」

「・・・・・・」

一回ノックをし、声を掛けたが返事どころか物音一つない。

カチヤツツ

匂は返事が返つてこないまま、ドアを開けた。すると、部屋の中には由奈の姿がなかつた。

ガシャーーンツ

そのとき、一階で何かが割れるような音がした。

匂は慌てて階段を降り、音がした方へ行つた。

「どうせ、またあの女と浮氣でもしてたんでしょう……」

「そんなこと、今はどうでもいいだろ！ それよりこの床に散らばつてる血はなんだよ？！ 由奈に何かしたのか？！！」

さつきの音をたてて割れたのはスタンダーランプだった。割れた破片が飛び散る中、由奈の両親は夫婦喧嘩をしている。あたりには、乾いた血の跡が、数滴ではなく、水溜りのようになつた。

「・・・・・・」

匂は何も言わずに、は飛び散つた破片を拾い上げて、夫婦喧嘩している二人に割つて入つた。

「そんなことしてる場合ぢやないよ。」

その言葉で我に返つたのか、由奈のお父さんは玄関へ走つていつた。

ガチャーンツ

ドアが壊れるくらいの勢いで開け、雨の中、外へ走つていつた。

そして、それを追いかけるように匂も由奈の家から出ていった。

「…………うう…………ういっく…………ひっく…………えっぐ…………ううう…………」

「あ…………」

壮太が秘密基地に入ると由奈がいた。基地の隅っこの方に座つて泣いていた。それもネグリジエの姿で。

「どうしたんだよ？」

「…………うう…………」

壮太が声を掛けてもうつむいたまま泣いているだけだった。

由奈の様子を見ると、裸足であることに気付いた。しかも、傘を差さずに来たらしく、髪がまだ湿っていた。

そして、ネグリジエからでている脚にはたくさんあざと傷口があつた。

ネグリジエの模様のせいで、気付かなかつたが、よくよく見ると、袖には血が布に広く染込んでいた。

第九話 「手のあたたかさ」

「・・・うひ・・・うえ・・・ぐ・・・。」

泣いている由奈。脚にはあざと傷。壮太はどうしたらいいのか分からなくなつた。

四三

基地三三七

手のあたたかさ

第九話

— 1 —

十一

壮太が由奈の顔をじっと見ている。泣き顔を見られたくない由奈は、手で必死に顔を隠した。

それでも、下から覗くように、壮太が見てくる。

・・ひ・・・な・・・なひよ?

由奈は途切れなかる裏声で言つた

「まあちゃんがさ、言つてたんだ。瞳を見れば、その人の気持ち
が分かるつて。だから、アメリカ人は瞳を見ながら話すんだつて。
壮太は微笑んで由奈の瞳を見た。

卷之三

その両方の言葉と笑って気が楽にならなかったのか、口の味が薄らぎはじめてきた。

一腕、大丈夫か？袖に血、付いてるけど

壮太が心配そうに腕を見た。

「うん・・・もう血、止まつたから。」

素つ氣無い態度で返した。

「・・・あ・・・見られちゃつた・・・体育の時だつて長袖とハイソックスで必死に隠してきたのに・・・もう意味なくなつちゃつた・・・。」

由奈が吹つ切れたように、喋り始めた。

「傷跡、残らなければいいけど・・・いつそのこと、整形して、こんな汚い身体捨てちゃ おうかな・・・。」

「汚くなんかないよ。」

その言葉が由奈の心に響き渡つた。

「だつて、こんな大きな傷口にも耐えて、治そうとしてる。偉いよ、由奈の身体は。」

壮太のひとつひとつの中葉が由奈の心を癒し、涙が溢れ出しそうになつた。

「ありがと。」

今日、初めて由奈は優しく笑つた。

「・・・寒い。」

由奈の身体は、雨に濡れたせいで、冷え切つていた。

「俺の服、着るか?」

壮太がTシャツを脱ごうとした。

「いいよ。壮太、それしか着てないんでしょ? 壮太が今度は冷えちゃうよ。」

「いいから、着ろつて。ズボンも貸してやる。俺はばあちゃんが雨だから持つてけつて言つたタオルあるから。」

壮太から服を突き出され、由奈は渋々隅のほうで着替えた。壮太は、後ろを向き、フェイスタオルをズボンの代わりに巻いた。

「くしゅんっ！」

壮太がくしゃみをした。

「壮太、大丈夫？ やっぱり、身体冷えたんじゃ……」

「大丈夫だつて。誰かが噂してつからくしゃみしただけだつて……くしゅんっ……くしゅっ……！」

壮太の胸に、由奈が寄りかかってきた。

「こうすればあたたかいよ。」

由奈は、壮太の身体に手を添えて言った。

「壮太の鼓動……速くなつてる……。」

そう言われ、壮太の顔が赤くなつた。

「……ママは……ママは男の子が欲しかつたの。でも、産まれたのはあたしで……難産で子宮を摘出しちやつて……ママはもう赤ちゃんが産めなくて……。」

去年のクリスマスにサンタは来なかつた……パパも帰つてこなくて……その日から、ママが泣いて、壊れて……。

あたしはどうすればいいかわからなかつた……けど、今日わかつた。

「どうしたいんだ？」

途切れ途切れに話す由奈に、壮太が問いかけた。

「ママから逃げたい。」

壮太の胸に、涙の零が零れ落ちた。

「由奈、帰ろう。」

壮太が立ち上がつた。

「でも、帰つたらママが……。」

「ママなら追い出せばいい。」

壮太は由奈に手を差し伸べた。

「『』めん。」

壮太におんぶされて、由奈が言った。

「いいよ。由奈、裸足だし。それより、ちゃんと傘持つとけよ。」

壮太は、前にランデセル、後ろに由奈を背負い、とても辛そうだ。由奈は、ネグリジェに着替えていた。だいぶ乾いていたのだらう。壮太もTシャツと短パンを履いていた。

「壮太、無理しないで。」

壮太の呼吸が荒くなってきた。

「あたし、降りるから。」

そう言うと、由奈は、壮太の背中から降りた。

「わつきより雨、ひどくなつてるし・・・ちょっと休まなきや。」

壮太と由奈は、バス停の雨宿りすることにした。トタン屋根は激しく唸るような音が出ている。

「・・・・由奈？」

由奈が壮太の肩に寄りかかつてきた。由奈は瞳を瞑つて寝ていた。きつどずっと泣いていたから疲れたのだろう。

「俺だって・・・・眠いのに・・・・。」

ザー――――

バシヤバシヤバシヤツ

「・・・・・あ！！」

大雨のせいで視野が狭い中、バス停が見えてきた。しかも、誰かベンチに座っているらしい。

「おじさん、こっち――！」

旬は大声で叫んび、手を振った。旬も由奈のお父さんも傘を持たず探し回っていたので、頭も服もびっしょり濡れていた。というより、現在進行形で濡れている。

「・・・・・！！」

バス停に駆けつけると、壮太と由奈は、互いに寄り添つて寝ていた。

「ふああ・・・。」

大きな口であぐびをし、壮太が起きた。

「由奈！－よかつたあ！－！」

そこへ由奈のお父さんが駆けつけた。大きな声だったのにも関わらず、由奈はすやすやと寝ている。

「えー・・・と悟は？」

「水谷 壮太って言います。」

「・・・由奈が世話になつたようだね。ありがとう。」

そう言つと、由奈のお父さんは由奈を抱きかかえた。

「あ・・・傘どうぞ。俺は濡れても構いませんから。」

壮太は由奈のお父さんに傘を差し出した。

「ありがとう。それじゃ。」

壮太から傘を受け取ると、由奈のお父さんは廊の中へと消えていった。

「・・・・・・。」

二人は、由奈たちが見えなくなるまで何も言わなかつた。

「旬、いつしょに帰ろうぜ。」

「断る。」

「んなこと言わずに帰らうぜ!？」

「やだ。」

即答されても、壮太も粘つたが、旬は足早に歩き出した。

（月曜になると、由奈は何もなかつたかのように登校してきた。あの日、由奈のお父さんとお母さんは離婚したらしい。でも、由奈は清々しい顔をしていた。それはとてもきれいな顔で見惚れるくらいだった。）

「壮太、そろそろあんたの番でしょ・・・ボソッ」

由奈が小言で話しかけてきた。今は、リコーダーのテスト中だ。

由奈はもうテストを済ませたようだ。

「それが・・・リコーダー忘れちまつて・・・ボソッ」

壮太はあえて秘密基地に置き忘れたことを言わなかつた。

「・・・」

「それじゃあ、次は水谷君。」

音楽の女の先生が壮太の名前を呼ぶ。順番が回つてきてしまつた。

「ハイッ！」

壮太は大きな返事をして立ち上がつた。が、リコーダーがないのがばれるのは時間の問題だ。

クイッ

壮太の袖を由奈が引っ張つた。

「あたしの貸してあげる。」

リコーダーを突き出して由奈はそっぽを向いていった。

「でも・・・」

「早く行かないと失格になつて居残りになるわよ。」

由奈が急かし、壮太は先生の元へ向かつた。

このあと、壮太は緊張したのか、それとも全く練習してなかつたかは分からなが、音程が多いにずれてしまつた。そして、クラスの全員にそのひどい音を聞かれてしまつた。

「壮太、結局失格で明日居残りじゃない。ちゃんと練習してた?」「練習したよ!完璧に!」

「なら、なんで居残りになつてんのよ?!」

由奈が壮太に問いただす。

「そ、それは・・・リコーダーがあれで・・・か・・・」「か?」

「だから・・・か・・・かんせ・・・」

「間接キス。」

「！」

匂に言われてしました。

「なつ！－！そんなこと思つて吹いてたの？－もう最低！－！」

「ち、ちげえつて！－！」

「どこが違う？」

顔が赤くなる壮太に対し匂が突つ込んだ。

第十話 「カゲフリ」

「ねえ・・・壮太、さつきから後付いてきて何してんの?」

教室から図書室へ行くまでの廊下で由奈が振り返つて聞いた。

「ばかっ! 急に動くな! 影が・・・」

ぼくらの

エミシ基地

第十話 「

カゲフリ」

「かげ・・・?」

「影以外のとこ足付いたら底なし沼なんだよ!」

「はあ? ・・・わけ分かんない。」

由奈は壮太の行動に呆れ果てている。

「つか、おまえ、なんで図書室行つてんの?」

「今日は新しい本届いたから、旬と本の整理よ。だから、帰宅するるのは当分後よ。」

「ええ〜〜! 僕、せっかく終業式終わって、今から夏休みなんだから、早く帰りたいんだけど。」

壮太は、由奈の影からはみ出さないように、一定の距離で由奈の後を付いてきている。

「勝手にあたしの影に付いてきて、文句言わないの!」

「んじゃ、他の影に移つてやる!」

とは言つたものの、廊下には余分な家具や機材がなく、図書室へ続く廊下は由奈以外、誰も通つていなかつた。

「・・・・・。」

「あら、他の影に移るんじゃなかつたの?」

由奈がからかう。

「俺も、丁度図書室に用事があるんだよ！」

「あら、そう。」

壮太の嘘はバレバレだ。

ガラガラッ

「「」めん、旬、遅れちゃって・・・。」

図書室に入ると、もう旬が本の入ったダンボールを担いでいた。

「いい・・・よ・・・。」

旬は、由奈の後ろにいる壮太に気付いた。

「・・・二人羽織でもするの？」

「しねえよ！影踏みだつ一つの！！」

旬の天然な発言に壮太が突っ込んだ。

た。

「ひのとり？」

「あ、鉄腕アトムとかの人だ。」

由奈は手塚治をからうじて知っているらしい。

「それ、おもしろいよ。」

旬が言つのだから、相当おもしろいのだ。

『火の鳥』は手塚治が手掛けた未完の作品である。第一巻は黎明編から始まる。3世紀の日本のヤマタイ国とクマソ国との争いが舞台である。他にも、ギリシャ編、宇宙編などとたくさんあり、未来と過去が交互に描かれている。

手塚治ならではのコマの使い方と物語がとても印象に残る作品で、唯一、学校に置かれる漫画だった。

「んーじゃあ、帰るまでこれ読んどくか・・・。」

壮太は胡坐をかきながら本のページを捲つた。

「ねえ・・・そんなにくつ付いて歩かないでよ。あたしが歩きに
くいでしょう。」

「だひてさひより、影が小さくなつてんだもん。しゃあねえじ
やん！」

「だつたら、あたしじやなくて、旬に付いてよ。」

「うるさいなあ。わかつたよ！」

由奈に言われ、壮太は旬の影に飛び移つた。

「・・・影料100円。」

旬が壮太に言った。

「金持つてねえよ！」

「旬は昔つからそーやつてからかうの好きだから。」

由奈が苦笑いしながら言った。

「そーいえばさ・・・由奈と旬つて結構仲いいよな。ヤスたちよ
り。」

「小学校入る前からの幼馴染だからね。」

由奈は旬に向かつて微笑んだ。

「旬は前からこんな性格でぼーっとしてたかな。」

「・・・由奈は昔は臆病だつた。」

「ええ！あたし、そんな臆病だつた？全然そんな意識なかつたん
だけど・・・。」

「だから、こいつして・・・」

壮太は由奈の手を取り、ギュッと手を結んだ。

「ずっと手・・・結んでたじやん。」

旬は顔を下に向き、隠しながら言った。

「そうだつたね。」

由奈には、旬の手の暖かさが懐かしく感じられた。

「じゃあね、またあした！」

「またあしたな～。」

旬は由奈の手を放し、手を振つて別れた。

「・・・またこつから先、壮太の影係かあ～。」

由奈がめんどくさそうに言った。

「あ、そうだ！・・・この前、壮太が貸してくれた傘、持つてきてたんだった。」

由奈は、ランドセルに掛けていた壮太の傘を手に取つた。

「「ひめんね、返すの遅れて。」

由奈は両手を合わせて言った。

「丁度いい！それ、日傘にすれば、日陰ばっちりじゃん！」

壮太は、由奈に返してもらつたばっかりの傘を差した。

「由奈も入るか？日差しきついし。」

「あたし入つたら、壮太はみ出て底なし沼にまつりやつかもよ？」

「いいよ。影貸してくれた借りもあるし。」

壮太に傘に無理やり入れられ、結局由奈は入つて帰ることにした。雨も、雪も降つてないのに傘を差している。とても変で、不思議な感じがした帰り道だった。

「やべー!!!! 勝った!!

スーパークリーナーのコントローラーを振り回しながら、由奈が言つた。

「毎日でふよふよ弱いよねえ……」由奈がせせら笑いして言う。

「トライ」にしないがな

「ああ、ほんないで！ テトリスたまには勘弁して……」
ゼウスから由奈はテトリスが苦手なようだ。

「てゆか、ヤス。またボンボン読んでるの？」

寝転がりながらボンボンコミックスを読んでいるヤスに由奈は言った。

「何回読んでもボンボンは飽きねえんだよ。口口口口はギャグだ
けど、ボンボンにはストーリー性があるんだよ。だから・・・・あ
ーだーーだ

「ヤスがゴミッケス誌を語りだした。・・・・・長くなりそうだ。由奈、プレステも64もあるのになんでスーザン三なの？」

せつぢやんが「ロロロロロ」を読みながら話してきた。その間

「えつええ・・・・・・・・・・・・」

「酔つから。」

「曲樂、3つゲーバジン盤つがい。」

由奈は恥ずかしそうに顔を隠した。

先に旬が答えてしまった。

「全部。・・・『シテじゃないとか・・・カメラグレーんてなるとか・・・ありえない方向にジャンプするとか・・・」

重症だ。由奈は鬱状態になつてゐる。

「あ・・・そういうえば壮太遅いね！」

せつちゃんはわざと話を逸らした。

「たしかに・・・あたし、ちゃんと匂ちでゲーム大会つて言つたのに。」

由奈の鬱状態が治つた。

「わらい！ 遅れた！！！」

噂をすれば、壮太が匂の部屋に入つてきました。

「何してたのよ？！」

「悪かつたつて！ これで勘弁してくれよ。」

「！」

ぼくらの

ヒルシ基地

第十一話

「三時間内にクリアしろ！」

「めどろ・・じど？」

壮太が取り出したのはスーパーファミコン用のゲームソフト『スーパー メトロイド』だった。

「せつ、うちにお密さんが来て、もらつたんだ。パチンコの景品だつてさ。」

「このキャラクター、スマブラに出てたやつじゃない？」

パッケージのイラストを指しながらせつちゃんが言った。

「これ、友達がやつてた。三時間内にクリアするとなんかいいことあつたような気がする。」

匂はこのゲームをみたことあるらしい。

「今日は休日だし、今からプレイしても6時までは時間あるか

りやつそくやりましょうよ。」

由奈はゲームカセットをスーパーファミコンに挿して電源を入れた。

重々しい音と暗い配色のドット絵がどことなく怖さを引き出せている。

一人用なので順番を決めて交代しつつやるにじた。

「あのブテラノドンみたいな敵かっこいい……」

「早くしないとタイムリミットが……」

「そこ！そこ！隠し通路あるじやん！……」

「像が動いた恐い！……」

「スーヶット！……コレで暑いところもへっちゃら……」

「壮太、そんなにミサイル使つたらなくなる……」

「こんな会話をしながら、三時間が過ぎようとしていた。

「やつとクリア！－タイムどれくらい掛かった？！」

「え～・・・つと一時間五十八分。」

壮太が訊くと、ヤスが答えた。

「んじゃ！エンディング終わったら何か起らるの？」

「そろそろエンディング終わるよ！」

みんな画面に食い付いた。

画面にスーツ姿のサムスが出てきたと思つたら、ポニーテールの女の人が出てきた。

「うそ！－サムス女だったの？！－！」

由奈はかなりのショックを受けている。

「由奈、そんなに落ち込むほどのことじや……。」

さりげなくせつちゃんに言われてしまった。

「それでも、旬つて結構こうゆつゲーム上手かつたんだあ！」

「！」

由奈が旬に後ろから飛びついた。

「・・・まあね。」

旬は照れくさそうに言つた。

「・・・・・。」

「壮太、どした?」

「え、あ・・・いや、ポニーテールつて案外かわいいもんだなと思つて・・・。」

壮太はせつちゃんに言われ、とつさに言つた。

「んじゃ、次はカービィやろう!!」

「ええ!まだゲームやんの?」

「あたりまえよ!そのためのゲーム大会だもん!!」

張り切つている由奈の様子をみると、きっと日が暮れるまでやるつもりだ。

第十一話 「喧嘩」

「そつうたあ～～ 誰でしょ～？」

由奈が学校のプール帰りの壮太を後ろから田隠しした。

「うわっ！～手、放せ！～！」

「誰か当てられたら放してあげるわよ。」

「いちいちめんどくさいやつだな。」

壮太は田隠しされたまま歩き出してしまった。

「あ～ちょっと、歩き出したら危ないって～」

といいながらも手を放そうとしない由奈。

ぼくらの

ヒミツ基地

喧嘩

十一話 「

「由奈があ～～するから」一なつたんじやん！」

「壮太があ～しなければよかつたんじやない～～！」

「なにやつてんの？」

壮太と由奈が口論している中に、旬たちが入ってきた。

「基地に来ないから心配してきたら喧嘩してたのかよ。」

ヤスの呆れ顔を浮かべた。

「由奈が悪いんだぞ！田隠しするから電柱にぶつかって・・・見
るよ、このたんこぶ！～！」

壮太は頭にできたたんこぶを見せつけた。

「それについては謝つたじやない！なのにまだ言つなんて最低！

！大体、壮太が歩き出したせいもあるじやない！」

二人とも背を向けている。

「もうあたし帰る……」

頬を膨らませながら由奈が言った。

「そうだ！帰れ帰れ……んでもう来んな……」

背を向けて歩き出す由奈に壮太はあかんべをした。

コンコンッ

「……由奈？」

ドアを開けて由奈の部屋に入ってきたのは旬だった。由奈はそのまま髪を梳いていた。

「旬、ちょっと髪結ぶの手伝ってくれる？」

「……いいけど。」

旬は由奈の後ろに立ち、ヘアブラシを手にした。

「ねえ、由奈？」

「なに？」

「壮太のこと好きでしょ？」

「はあ？！な、ナンデアタシガ……」

由奈の顔が噴火したみたいに真っ赤だ。しかも話しが片言だ。

「……やつぱり。」

「そ！そんなことよつさつさと結びなさいよ……！」

「はいはい……」

「あ……。」

秘密基地の前には、壮太一人ぽつんと立っていた。

「あ……え・つと……」

話しかげづらい。

「由奈、その髪型どした？」

壮太は至つて普通に話しかけてきた。

「これ？・・・たまにはポニー テールもいいかなあって。」

「似合わない。」

きっとぱり言われてしまつた。

「なつーーーせつがくあんたのためにやつてあげたのにーーー」

「だれ先してくれなんて頼んでねえよ!!」…………つか…………

方正子集卷之二

壮太は由奈の後に手を廻し、結んでいた髪を解いた。

「おまえは」つちの方がぜつてえかわいい。

「・・・・・。壯太・・・・・顔真つ赤だよ？」

壯太は慌てて顔を隠した。

「あいつの仕事の顔見た！。ねえ、見なしてよ？ ねえねえ？」

「ハーバードを見下す力が何よりも大切だ」

いいじゃん見るだけだからさ！」

顔を必死に隠す咲太に由奈は見よ、と下から詫いたりしている

58

第十二話 「ヒマワリ」

「今日、誰も基地に来なかつたし。」

小石を蹴飛ばしながら壮太が日の強い午後の道を歩いている。

「ん！由奈~~~~~！」

遠くに由奈の姿を発見し、壮太は思いつきり手を振つた。

ぼくらの

ヒマワリ基地

十三話 「

ヒマワリ

「壮太、丁度よかつた。……てゆか大丈夫？」

息を切らして走つてきた壮太を由奈は心配した。

「大丈夫だ・・・・つて。んで丁度い・・・・なにが？」

壮太が顔を上げた。

「これ！」

由奈の手には両手い・・ぱいの向日葵が摘まれていた。

「学校の裏の畑にいるおじこさんにもうつたの！毎年くれるんだ

よ~

由奈は上機嫌で話す。

「・・・・んで？」

「だから、半分持つてほしいの！」

「ええ~、めんぢくさ・・・・。」

「ほら、さつさと持つ！~」

由奈は強引に壮太に向日葵を半分持たせた。

「壮太って将来の夢あるの？」

ひたすら一步道を歩いている最中、由奈が唐突に訊いてきた。

「ん~・・・ミユージシャンかな。」

「うそ？！冗談でしょ？」

由奈が笑いをこらえるように手で口を塞いでいる。

「意外に俺、歌作るのつまいんだぞ！」

「リコーダーもましに吹けないじゃない。」

「そのうちギターが弾けるようになるからいいんだよ・・・」

壮太はすっかりからかわれている。

「そーゆー由奈はどうなんだよ？将来の夢あるのか？」

「・・・あたしはないかも。できるならこのままがいい・・・

かな。」

「ええっ！じゃあ、おまえ大人になりたくなえの？」

「そういう意味じゃなくって・・・。」

「んじや、どーゆー意味？」

「だから、こういう状況。」

「どーゆー状況？」

「あ~もう、だから、こーゆー状況！」

「だから、どーゆー状況だよ？！」

そんな話しぶしながら一人は帰り道を歩いていった。

「それじゃ、またあしたね。・・・あ、そうだ。その向日葵、

壮太にあげるわ。」

「くれんの？マジで？！」

「運んだのは壮太だもん。それにたくさんあつても飾る場所ない
もの。」

「サンキュー！~んじや、またあしたな！」

壮太は嬉しそうに向日葵を抱えて帰つていった。

「壮太、喜んでたけど、ちゃんと向日葵の世話してるかしづり・・・？」

テーブルに置かれた花瓶から一輪の向日葵を取り出し、由奈が呟いた。

力チヤツ

ドアの開く音が聞こえた。

「パパ、おかえりなさい！」

由奈は走つて玄関まで迎えに行つた。

「今日、たくさん向日葵もらつたん・・・！」

由奈の手から一輪の向日葵は儚く落ちていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1863f/>

ぼくらのヒミツ基地

2010年10月9日16時56分発行